



「下村満子の生き方塾」ニュース

Vol.18 2018.01

— 2017年7月勉強会特集 —



日本人の心の原点「まごころ」を見る



映画をテーマに対話する田中監督と下村塾長

「下村満子の生き方塾」は7月24日、福島県郡山市の市民文化センターで7月勉強会を開きました。田中光敏監督の「海難1890」上映後、田中監督の「映画に学ぶ」と題した応援団講義がある、贅沢な企画だったことから、一般参加も認める「一日生き方塾体験」にし、塾生、応援団も含めて250人が出席しました。「海難1890」の上映にあたっては、濱田総一郎塾生（9月から副塾長に就任）から多大な資金援助があり、これも成功の要因の一つでした。田中監督は夜遊び学にも参加し、塾生の質問に対しても丁寧に答えるなど、人柄の良さが滲み出ていました。「海難1890」は、今では死語になってしまった、見返りを求めない「真心（まごころ）」をテーマにした作品で、田中監督は日本人の美德であった「真心」を忘れてはいけないと強調しました。一般来場者からは「日本人の心の原点を見た」「とにかく感動しっぱなし」など、好評ばかりでした。（文責・皆川猛）

塾生「自らを語る」白鳥則生さん

遠藤正志塾生の点鐘による10分間坐禅、阿部洋子塾生のリードによる塾生五訓の唱和に続き、今期入塾した白鳥則生塾生が以下のように自らを語りました。

● 「頑張れば自ずと結果は出る」

「4月に60歳になることから、3月に兼務役員を離れ、立場が変わるなど、色々と考えることがありました。多くの人と同じように、これから何をすべきかと悩みましたが、まずは自分を見詰め直したいと思って「生き方塾」に入りました。入塾してまだ3カ月足らずですが、いろいろな方の話や活動を聞いているうちに、現役として、まだまだやっていける気がしています。

持論は「人生は、そうは思い通りにはいかないけれども、



恒例の10分間坐禅

懸命に頑張れば、自ずと結果も出る」というものです。生後間もなくポリオを経験していますが、健常者に負けない気持ちで生きてきたと思っています。

私は1957年4月5日、5人兄妹の末っ子に生まれました。一番上の姉とは12歳も離れています。小さい時にポリオに罹り、小学3年の時には色弱と判定されるなど、ハンディもありましたが、よく遊んだ楽しい少年時代でした。通学したのは小中一貫校でしたが、優秀だった兄とは違い、勉強はあまりしなかったため、やっとの思いで中学校に進めました。

小学校の苦い経験から中学では、公立高校を目指して勉強し、第一希望の高校に入学できました。医学部に行こうと考え理系で学んだのですが、色弱だったので医学部は諦め、一浪して慶応の経済学部合格しました。理数系の入試科目の配点が高かったのが幸いしました。

会社巡りをした結果、名古屋に本店を置く東海銀行（現三菱東京UFJ銀行）に就職しました。銀行では事務系の本部が主な職場で、経営コンサルタントの資格を取り、組合の専従を経験するなど、珍しく大変貴重な経験をさせてもらいました。民間企業への出向は、その制度ができて、私が第一号で、この会社が今、私が勤めているところです。

コンピューターに不具合が出るといわれた2000年問題に直面していたため、その対策を講じるために、銀行に戻りました。2000年問題は乗り越えれば良かったころ、東海銀行は三和銀行と合併することになり、今度は合併に向けた仕事に就きました。その後、以前、出向していた現在の会社から声を掛けてもらい、45歳を目前として転職しました。

きっかけとなったのは、創業者会長の本業一筋の経営姿勢に感銘していたことです。日本経済は中小企業が支えています。会長は競争が激しい薬品業界で生き残りをかけ、ニッチの部門でリーディング・カンパニーとして陣頭指揮をとっていました。社は主に製薬装置を製造販売していました。

プリンター業界では、耐久商品の機器と消耗品のトナーを製造販売して、生き残っていました。その様子を見て、



「頑張れば自ずとけ結果が出る」と話す白鳥さん
会長は製薬装置だけを売るだけでは頭打ちになるから、製薬のプロセスに必要な添加剤も製造販売すべきだと考え、ハードとソフト両面を手掛ける会社として今日を築き、この結果、会社の経営は安定しています。添加剤は原料ですから、売り切りの商品ではないからです。

これまでの短い経験ではありますが、会社の業績を伸ばすには、創造力を持った人材を確保し育成することに尽きます。企業の成長には、健全な赤字部門が必要であると同時に、二律相反ではありますが、不良債権は早急に整理することです。懸案はすぐに処理することが大事です。

4月から入塾して、利他の精神を学びました。中小企業が生き残るには、まず自分たちのことが優先されますが、成長するには、利他の気持ちを持つ必要があると気づき、利他の精神を導入する必要があると、考える様になりました。具体的には、自前主義から、関係企業と協働しながら社会貢献をしていきたいと願っています。

繰り返しになりますが、短い60年の歩みを振り返ると、懸命に頑張ると、必ずいい結果が出るということです。思い通りにはいかないのが人生ですが、目の前の課題に必死で取り組めば、必ず新たな展開が約束されます。共に学びましょう。」

杉江副塾長挨拶

● リーダーにはフォロワーがいる

白鳥塾生の「自らを語る」に続いて、杉江和男副塾長が次のように話をしました。

——下村塾長とは15年前に経済同友会で知り合い、長い付き合いになりました。今日のゲストである田中監督も私と同じ北海道出身、しかも襟裳岬と、ともに田舎育ちですので、親近感があります。「海難」は以前見ましたが、とてもいい映画です。

今日は、実は、皆さんもリーダーになれる、ことをお話したいと思います。

ドラマ、内村鑑三、新渡戸稲造らが真のリーダーであることは疑いはなく、安倍さんがリーダーがどうかはいろいろ意見があるでしょうが、安倍さんの功績を挙げると、お札をたくさん刷って金融緩和をし、結果株価が上昇しています。景気がよくなりました。積極的に外交に乗り出し、

途上国のインフラを整備しています。ただデフレ脱却という一番大きな課題は解決できていませんが。

安倍さんのリーダーとしての欠点は、地位を利用して特定の人に便宜を図り、夫人も総理という夫の地位を利用しています。それに安倍さんは勘違いしています。野党に対する不支持率を自分に対する支持だと思い込んでいます。国民は、野党があまりにだらしないから不支持なのです。安倍さん不支持の受け皿になっていないからです。かつては65%のフォロワーがいましたが、今は29%しかいません。

25年前になりますが、私の家の前に病院ができて、院長がわざわざ挨拶に来ました。その院長は開院の3、4年前、尿路結石で東邦大に入院した時の主治医であり、私大医学部の医師なのに「お金」の匂いがしませんでした。看護師にも慕われ、患者の信頼も厚い人でした。きっとリー

ダーになる人だと思っていたら、院長というリーダーになりました。リーダーには必ずフォロワーがいるものです。

リーダーに必要な要素は、人間力、情熱、公平、コミュニケーション能力、問題解決力、専門知識などがありますが、欠けている要素を補ってくれるのが実はフォロアーなのです。フォロアーを作るには、知恵が必要なのです、そのために

は①目の前のことに頑張る②仕事にはできるだけ早く取りかかる。まずやってみる。やり直しが利きます③目標はできるだけ高く持つ。改善ではなく本質の解決になる④自分が制御できることに頑張る。今の仕事に頑張る⑤反省すれども後悔せず。

以上で私の話は終わりです――

塾長講話「フェイクニュースの恐ろしさー第一弾」

フェイクを見極める力を



「クローズアップ現代」の映像

「フェイクニュースという言葉が知られるようになりましたが、様々なニュースや情報が洪水のように溢れているのが今の世の中です。こうした情報過多の時代に、これをどう受け止めるのか、考えたいと思います。まず、NHKのクローズアップ現代が特集した『フェイクニュース―トランプVSメディア』を見ましょう」

DVD上映（放送内容の要点を抜き書き）

――アメリカ大統領がみずからの主張をツイッターで発信する時代。そのつぶやきが連日、世界を揺るがしている。時に感情的な言葉が大手メディアを介さずに2000万人のフォロワーから世界へ拡散されていくのだ。

その一方でトランプ大統領は、メディアを嘘つきと呼び、敵視する姿勢を隠さない。大統領選で不正投票が行われていたとする、みずからの主張に根拠がないと追及されると…、言を左右にする。何が嘘で、何が真実なのか。混乱するアメリカ。

● 嘘を真に受ける社会が問題

今回、アメリカ大統領選の最中に、フェイクニュースを発信し続けたサイトの制作者が取材に応じました。そのサイトの名前は、皮肉にもこちら、リアル・トゥルー・ニュース、本当の真実のニュースというんです。面会の場所に指定されたのは地元の人でにぎわうバー。フェイクニュースを作っているという男性だ。名前はマルコ・チャコンさん。金融機関の重役を務めているという。チャコンさんは仕事の合間を縫って、友達にジョークを楽しんでもらう目的で、3年前にそのフェイクニュース・サイトを開設した。これまでに書いた数百本の記事は、すべてがフェイクニュースだ。

こうした動きを加速させたのが、去年の大統領選挙だ。フェイクニュースと呼ばれる偽の情報がインターネット上にあふれ人々を惑わせた。例えば、ローマ法王もトランプ氏を支持。例えばクリントン氏を捜査するFBI捜査官が無理心中、などなど。

フェイクニュースをきっかけに銃撃事件まで起きた。クリントン氏が児童売春組織に関与しているという偽のニュースを信じた男が、拠点とされたレストランを襲撃した。

フェイクニュースは、なぜどのようにして生まれるのか。デーブ・スペクター、池上彰登場

「フェイクニュースによって、今、アメリカ、大変な混乱に陥っているように見えますけど、デーブさん、どうなんですか？」

デーブ「本当なんですよ、しゃれで済ませられないですね。特に去年から、実際に選挙に影響を与えたわけですから、結果まで左右したかどうか別として、恐ろしいと思うんですよ。前だったらおもしろくて見ていたようなもの作って、パロディーとか、それだったらよかったんですけども、今回のものは違いますね、悪意がありますね」

「池上さんは、まあこれだけフェイクニュースがまん延して、それが社会を動かすまでになっている、この状況、どう見ますか？」

池上「去年の英語圏のいわゆる流行語として選ばれたのが、Post Trues。要するに、人は真実ではなくて、とにかく感情的に心が揺さぶられれば、それでいいと、真実は二の次だというようなことが広がっているという、これが去年の流行語に選ばれた。もはや、そういう時代になっているのかということですよ。真実じゃなくてもいいんだっていう時代になったんじゃないかと」

今では1本の記事に2万回以上のアクセスがあるという。

例えば「秘密の世論調査で、トランプ氏がリード」という去年8月の記事。内容は「メディアは隠しているが、トランプ氏が圧倒的に有利だ」というもので、明らかに嘘の情報を伝えた。当時、大手メディアは、クリントン氏がトランプ氏をリードしていると報じていた。しかし、このフェイクニュースは数万アクセスを記録した。チャコンさんのフェイクニュースは、手の込んだものになっていく。

選挙戦を通して若者からの支持の伸び悩みが課題となっていたクリントン氏。そこでチャコンさんは、クリントン

氏が非公開の講演で「若者は負け犬だ」と発言したという嘘のニュースを流したのだ。このフェイクニュースを大手メディアがニュース番組で引用し、報道。

その後、嘘が明らかとなり謝罪する事態にまで発展した。

今も新たなフェイクニュースを発信し続けるチャコンさんだが、嘘を真に受ける社会に問題がある、と語る。フェイクニュースが広がる背景には、SNSを通して自分が興味のある情報だけを受け取ろうとする人たちの増加がある。

東部・ニュージャージー州で非正規の仕事をしているジンジャー・ベルさんは、テレビや新聞は全く見ない。スマートフォンが唯一の情報源で、関心があるリベラルな政治や環境問題のニュースがほとんど。もともとフェイスブックを通じて、さまざまな立場の知人と情報のやり取りをしていたベルさんだが、自分の考えと異なる意見や見たくないニュースに煩わしさを感じるようになりSNSの設定を変えて情報が入らないようにした。今、ベルさんは自分が好む情報だけを受け取るようにしている。

SNSに詳しい専門家は、同じ考えの人から流れてくる情報ばかりに触れていると、フェイクニュースが紛れ込んでも疑いを持たなくなると指摘する。フェイクニュースによって、アメリカ社会というのは、どう変わってしまった

● 世論操作をしたい権力者

池上「例えば権力者というのは、なんとか世論操作をしたいという思いがあって、例えば事実を自分の都合のいいように解釈をちょっと変えるということは、これまでやってたんですけど、トランプ政権の場合は、そもそも嘘を平然と言う。例えば、大統領就任式に集まった人の数を、実際は少なかったのに非常に多かったと言ってみたりして、それはおかしいじゃないかって指摘されたら、それはオルタナティブ・ファクト（もう一つ別の事実）だと詭弁を弄する。普通の言葉で言えば、嘘なんですけど、嘘と言わないで、オルタナティブ・ファクトと言い張るといって、まさに今、トランプ政権のもとで、こういう事態になっているということです。何かを指摘して質したとしても、もう一つそっちが事実なんですよと言われてしまう」と

「池上さん、実は、先ほど日本時間の9時過ぎに、トランプ大統領がツイートしました。

その内容。「私に否定的な世論調査は、すべてフェイクニュースだ」

池上「なるほど。とにかく私に否定的なものはすべてフェイクだと言い張るっていう。大変分かりやすいツイートですね」

「ネットメディアの最新状況を研究している法政大教授の藤代裕之さんにお伺いしたいと思います。今、私たちは一体どんな時代を生きてるんでしょう？」

藤代「ニュースの流れが根本的に変わってしまったということ、まず自覚していく必要があると思うんですね。発信者と、拡散する人っていうのは別にいるんですね。だからこそ、トランプは、トランプ政権というのは拡散、人々の拡散というのを力にして、オルタナ・ファクトを伝えることもできるようになっているという仕組み、インターネットの仕組みが実はあるんです。このパワーを利用すること

いるのか。フェイクニュースによって、社会の分断がより深まっていると感じていると、取材した記者は言う。

フェイクニュースは今も日々、作られ、最近もオバマ前大統領が任期が終わるのに、ホワイトハウスから離れるのを拒否すると述べたなどといった、嘘の情報が広まった。

取材記者は言う。「私もどんな意図でフェイクニュースを作っているのかと、身構えて取材に臨んだんですが、実際には軽い気持ちで作られているという、その落差に驚きました。

アメリカでは今、多くの人が、真実が何かよりも、自分が信じたい情報を信じるようになっていきます。それぞれが自分の殻に閉じこもり、多様な意見が耳に入らなくなる、そんな状況に危うさを感じます」

「フェイクニュースを、軽い気持ちで作っている人もいるという話ですが、アメリカ大統領選のときに盛んに発信されたのは、政治的意図を持ったフェイクニュースです。プロパガンダによって、多くの人に影響を及ぼしたり、外国人、移民に対する差別や排斥に利用されたりもしているということなんですけれども、池上さん、フェイクニュースがこういうふうにまん延することは、社会にどういう作用があるか？」

にたけている」

「フェイクニュースの意図はいろいろありますけれども、やはり拡散されることで、大きな影響力を持つんですが、こんな調査があります。アメリカ人を対象にした調査で、フェイクニュースを拡散させてしまったことがある人の割合は23%、5人に1人に上っている。デーブさん、アメリカ人はなぜフェイクニュースを？」

藤代「一つには、メールで来るものをよく転送したりしまして、よく見ないで送るんですよ。知り合いの好みのニュースとかのものだったら、送っちゃうんですよ。後で見たら、これは嘘っぽいなと、思うんですけど。つまり慌ただしくて、ネットのユーザー、スマートフォンもそうですけども、とにかく錯そうしている。回転ずし状態で、好きなものをあわてていっぱい取るんですよ。ですから、冷静に見てないんです。どんどん新しいものが来て、それはちゃんとした媒体かどうか確認せずに見ている。もう一つ情けないのは、間違いを訂正していないことです。きちんとしたニュース媒体だったら、間違えました、と訂正しますが、今は違います。更新、アップデートですよ、間違っただけを平気で許される許容範囲が大きくなったこともまた問題です。それから拡散させてしまう理由のもう一つが、情報の受け手の状態を表す言葉として、フィルターバブルという言葉があるんですけども、これ、インターネット上で、さまざまな友人、あるいは情報とつながっているようでも、実は利用者というのは、見えないバブル、泡に覆われていて、偏った情報に囲まれていて、真実が見えなくなってしまう状態にあるということです」

「藤代さん、これがフェイクニュースとどう関連する？」

藤代「いろんな情報が世の中にありますよね。しかし、イ

インターネットというのは、アルゴリズムというプログラミングの仕組みで、自分が、いいと思ったこと、同感したもののばかりが表示されるようになるんですね。例えばそれに、「いいね！」がつく、さっきデーブさんがおっしゃったように、シェアされてくる、そしてシェアするというのがあると、それが正しいのかなと思ひ込んでしまう。それがフィルターバブルだっていうことなんですね」

● 事実が嘘に塗り替えられた

「インターネットが始まったときは、あらゆる情報を見ることができ、夢のように語られたんですが、結局今は、みんな信じたいことだけを見るということによって、本当に個々に、ばらばらに分断されていると思うんですね。こういった状況の中で、さらに新しい情報に基づいたニュースがフェイクニュースによって事実が塗り替えられてしまうという、深刻な事態も起きています。先月一人のジャーナリストが、ツイッターを通じて助けを求めた。『事実が嘘に塗り替えられてしまう。どうすればいいのかわかなくて教えて下さい!』」

投稿したのは、ドイツの地方新聞紙のベテラン記者ペーター・バンダーマンさん。彼は、去年の大みそか年越しを祝う人々の取材に向かった。バンダーマンさんが撮影した動画には、花火や爆竹を鳴らして年越しを祝う市民たちに交じって、中東などからの移民が楽しむ姿も映っていた。その夜、別の場所では、ぼや火事騒ぎが起きた。工事中の教会のネットに花火の火がついたというものだ。

バンダーマンさんはインターネットに、年越しの様子の記事と動画を掲載した。ぼや騒ぎはあったものの、例年と変わらない光景だったと伝えた。ところが、数時間後想像もしていなかった事態が起きた。自らの記事が異なる形でオーストリアのニュースサイトに引用されていたのだ。その記事には、シリア人が「アッラーは偉大なり」と叫び、教会に火をつけたとあった。無関係な事柄を組み合わせ、彼らが放火したかのように描かれていた。さらに2日後、移民やイスラム教徒に排他的とされるブライトバートのロンドン支局も引用記事を掲載した。タイトルは「1000人の暴徒が警察を襲撃。ドイツ最古の教会に放火」。移民たちがイスラミック・ステートなどの過激派組織と関連しているかのような描写もあった。

バンダーマンさんが取材した事実とは全く異なる2つの記事は、世界中に拡散し、分析ソフトを使って検証すると、オーストリアの記事はヨーロッパを中心にSNSで2万5000件ものシェアなどがあった。また、各国に読者を持つブライトバートでも2万件以上の反応があり少なくとも世界28か国に広がっていった。

バンダーマンさんのもとには誤った記事を信じた人々から1000通を超える非難のメッセージが届いた。社内では対応を協議した結果、反論記事を書いて誤った情報を正していけば事態は収まると考えた。反論記事に書いたのは移民が集まっていた広場とぼや騒ぎが起きた教会は別の場所であること。「アッラーは偉大なり」という言葉はイスラム教徒が日常的に使う言葉であることなど、詳細に説明する記事を掲載した。しかし、この反論記事に対する書き込みやシェアなどは国内を中心に僅か500件余り。世界に拡散された誤った情報を打ち消すことはできなかった。

シリア人が教会に放火をしたという、このフェイクニュースを拡散させた、アメリカの保守系サイトのブライトバートなんですけれども、経営責任者だったのが、スティーブ・バ

「池上さん、いつのまにかわれわれ、フィルターバブルの中で情報を得ているという状況なのですね」

池上「やっぱり結局、検索をしても、自分の見たいものだけを調べていく、結局、見たいものだけを見る、信じたいものだけを信じるというふうに、ある種のたこつぼ状況にみんな陥っているんじゃないか」

ノン氏。この人、現在ですね、政権運営全般にわたってトランプ大統領に助言する上級顧問の役（当時）にあるということなんですけど、デーブさん。どう思いますか？」

デーブ「確信犯ですね。本来ならば、とんでもない人を閣僚に入れたんですね。トランプ大統領ならばまだなんとか我慢しても、こういう人たちが背景にいるというのは、もう歩くヘイトスピーチに近いんですね。やってることは、本当はとんでもないんですね。今回、トランプ政権がイスラム圏の7万人を一時入国を拒否しましたね。その大統領令の下書きを書いたのがこの人だと言われていますよね。という、結局、事実が塗り替えられて、民族間、あるいは宗教間の負の感情を湧き起こさせられるとしたら、それは本当に問題にもなりますよね」

「だとしたら、池上さん、では既存メディアは何ができるのか」

池上「これ本当に難しいことですよ。つまりこれまで通りのやり方ではだめだということです。ニューヨーク・タイムズも、それこそフェイクニュースだとずっと非難され続けましたね。ニューヨーク・タイムズも初期のころは、『こういうことを述べた、でもそれは事実と違う』という言いかたしてたんですが、最近は態度を変えて、『トランプ大統領がこういう嘘をついた』というのを見出しに書くようになったんですね」

「真っ向から？」

池上「真っ向から対決するようになった。そうしたら、去年の10月から12月までの3か月間に、ニューヨーク・タイムズの電子版の購読者が、27万6000人増えたんですよ。つまりきちんと反論すると、それを見てくれる人もまたいるということです。最終的にメディア・リテラシーですよ。見る側が判断できないならば、見る側の問題になるんですよ」

「藤代さんはどう思われますか？」

藤代「先ほどの話しのように、正しい情報を出しても、それがフェイクの拡散のスピードに、全く追いつかない現状もありましたよね。でも一方で、ニューヨーク・タイムズをもう一回読もうという人も増えている、今、どういう状況にあるんですかね？ やっぱり拡散部分というのが、社会に大きな影響を与えるようになってきているわけですよ。そこを担ってるネット企業が、やっぱり情報に責任を持つ、そういうことも非常に重要になってくるんじゃないでしょうか」

「こういう情報を出しているインターネット企業、そこにどれぐらい責任があるのか。あるいはその情報を全部、そもそも出している、いわゆるプラットホームというんですけど、それぞれインターネット企業、情報を乗せている企業の責任ということも問われてくるということでしょう」

DVD上映の後、塾長は次のように話しました。

情報源をネットに頼るな

—ドイツの大晦日の花火、教会のボヤ騒ぎが、ガイスラム教徒による教会の焼打ちになってしまったフェイクニュース。それを訂正しても、フォロワーは少ないからフェイクが拡散してしまう。恐ろしいことです。

民主主義は、多様な意見があり、少数意見であっても尊重することが基礎ですが、今の社会は、違う意見は煩わしいから見ない、聞かない。ネットを開けば、その人の好みに沿った事柄が羅列しているから、ますます自分の世界は狭くなってしまふ。ところが本人は、ことの重大性に気づいていない。

ロシアは米大統領に介入したけれど、トランプはごまかし続けています。トランプはフェイクニュースやツイッターでクリントンを貶め、トランプの息子らはFBIから取り調べを受けています。

日本も同じです。安倍首相は記録がないからと言って、森友や加計問題をうやむやにして、嘘までついています。記録を見せられるとそれは怪文書と言ひ、新たな証言が出て嘘を追及されると、発言を訂正する。証拠はないのだから、嘘をつかなければ損だという考え方は、とても危険だと思います。

稲田防衛大臣がソマリアPKO問題で、明らかに虚偽答弁したのに、総理はかばい続けました。稲田さんを重宝しているのは、彼女が右翼だからですが、一度嘘をついたら最後まで誤魔化し続けなければなりません。最後には破たんしたから、大臣を辞めざるを得なかったのです。

ヒトラーは民衆が感じていた社会の閉塞感を、嘘いっぱいのプロパガンダを駆使して全てユダヤ人のせいにして実権を掌握しました。フェイクと真実を見極める力を身につけることが、今こそ必要なのです。ネットだけを情報源にしていたら、ニュースの取捨選択をしないから、思考停止になってしまい、嘘に気づかない人間になってしまいます。嘘のニュースを意図的に流されているのにチェックできないのが多くの現代人です。皆さんの意見を聞きたいと思います——

佐久間広幸塾生 「ニュースの真偽を含めてニュースそのものを判断しなければならぬ時代に入ったと思います。そのためにはまず、自分の判断力を磨かなければと感じています」



フェイクニュースについて塾生と意見交換



フェイクニュースの怖さを指摘する下村塾長

下村塾長 「人の考えを変えようとする悪意を持ったプロパガンダ、記事を流しても責任を問われないインターネットの世界は、表現の自由の壁はあるにしても何とかしなければいけない時期に来たような気がします。熊本の地震の際には、動物園からライオンが逃げたというまことしやかな映像つきのフェイクニュースがユーチューブで流されました。多くの人はそれを信じ大騒ぎとなりました。遊びとは言えない悪意ある仕業です。

最近の記者会見を見聞きして思うことは、メディア自身が見たくない。政権に対して再質問はないし、さらなる追及がありません。トランプはツイッターはじめ様々な手段で、自分に不都合なニュースをフェイク、フェイクと叫び、それによって人々も、トランプ政権に批判的なメディアに対してフェイクの温床と疑いをもち始めています。それこそトランプの戦略が功を奏しているのです。

田中監督 「自分たちの想像以上に情報が拡散しているのが今の時代です。スピードは速く量も大きいから、それを判断できません。経験ですが、宣伝した作品に対して悪意を持った情報を流し、それを信じた映画を見ていない人たちは、映画館に来ないというケースは少なくありません。だから常に確認していないと、自分が加害者になってしまいますので、気が抜けません。どうやってフェイクと戦うのかが分かりません」

中島好美塾生 「普通のキャッチでは客が来ません。そこである飲料品メーカーは、ネットで常識とはかけ離れたかなりきわどいキャッチを使いましたが、非難を浴びて中止しました。今は何でもありといった社会ですから、やらねば損という風潮が出ています。ネットのアクセスが多ければそれだけ収入増に直結するから、きわどいキャッチコピーが幅を利かせています」

杉江副塾長 「日本の商売は対面でやってきました。この方式に対しては、欧米から非能率的だと批判されましたが、決して間違った商慣行ではありません。ネットでの商いでは真意が伝わりません。こういう無機質な社会で生きている若い人たちがこれからどんなことをするのか、怖く感じることがあります」

下村塾長 「とにかく情報の価値、確度を見極める目を養うことです。まずはネット頼りはやめることでしょ」

無償の行いが映画を作らせた

「海難 1890」は、田中監督が 2015 年制作した映画。日本とトルコの友好 125 周年を記念して、合作及び朝日放送創立 65 周年記念作品第 2 弾、BS フジ開局 15 周年記念作品として制作されました。和歌山県串本沖で 1890 年に起きたエルトゥール号遭難事件と、1985 年のイラン・イラク戦争勃発時に、テヘランに取り残された日本人の救援のため、トルコ政府が救援機を飛ばして救出した出来事の顛末を描きました。

あらすじはこうです（東映ニュースから引用）。

——1890 年 9 月、オスマン帝国最初の親善訪日使節団を載せた軍艦「エルトゥール号」は、その帰路の途中、和歌山県串本町沖で海難事故を起こし座礁、大破。乗組員 618 人が暴風雨の吹き荒れる大海原に投げ出され、500 名以上の犠牲者を出してしまう。しかし、この大惨事の中、地元住民による献身的な救助活動が行われた。言葉の通じない中、避難した小学校では、村中の医師が集まり応急手当を行い、台風の影響で残りわずかな蓄えにもかかわらず、食糧や衣類を提供。そのおかげで 69 名の命が救われ、無事トルコへ帰還することが出来たのだ。この出来事によりこの地で結ばれた絆は、トルコの人々の心に深く刻まれていった。

時は流れ 1985 年、イラン・イラク戦争勃発。サダム・フセインのイラン上空航空機に対する無差別攻撃宣言に



「海難 1890」を鑑賞するために会場を埋めた観客によって緊張が高まった。この宣言後、在イランの自国民救出のため、各国は救援機を飛ばし次々とイランを脱出。しかし、日本政府は救援機を飛ばすことが危険と判断し救助要請に応えなかった。テヘランに残された日本人は 215 人。メヘラバード国際空港で誰も助けの来ない危機的状況に陥り絶望の淵に立たされた。この状況を打開すべく、日本大使館はトルコへ日本人救出を依頼。トルコ首相は、それを快く承諾。まだ 500 人近くのトルコ人がテヘランに残っていたにも関わらず、日本人に優先的に飛行機の席を譲ったのだった——。

田中監督応援団講義

「海難 1890」上映の後、田中監督は、「映画に学ぶ」と題して次のような応援団講義をしました。

● 理屈抜きに動こう

——今、自分が監督した映画「海難 1890」を見ましたが、正直言って、自分が作った映画を見るのは、嫌なのです。なぜかと言うと、あすれが良かった、こうすれば良かったなどの後悔ばかりが募るからです。でも今日は違います。尊敬する下村さんや「生き方塾」の皆さん、市民の方々と一緒に、落ち着いた環境の中で見る事ができたからです。「海難」を映画にしたきっかけです。

実は 2005 年、大阪芸大の同窓生である串本町長から、エルトゥール号の話聞かされたのです。2001 年に町長室の「開かずの金庫」からエルトゥール号のトルコ人遭難者の診断書とオスマン帝国政府へ宛てた手紙を発見した。手紙には治療費の支払いを申し出たオスマン帝国政府に対し、治療費の受け取りを断る旨が書かれていた、というのです。

撮影のために取材すると、遭難者を救った大島の島民の末裔たちは、「救いの手を求めている人に、手を差し伸べることは当たり前なこと」と誇らしげに自分の祖先が行ったことを話していました。目の前にいる困った人たちを助ける

無償の行い。これが私に映画を作らせる気持ちになったのです。忘れかけている日本人の心をきちんと伝えたいと思ったのです。

映画の世界では、良い結果は準備次第と言われております。8割が仕込みであり、制作は 2割。良い原因には良い結果という因果必然の法則があるのです。4分半のために 1週間かけてセットの撮影準備をします。大島の医師役を演じた内野聖陽さんは、当時の京都大医学部の治療法に基づく手術の撮影のために、1か月半コンニャクを使って練習しました。本番の撮影はたった 4日間です。

「海難」のテーマの一つは「真心＝まごころ」です。見返りを求めない心ですが、日常生活では死語になっていますから、撮影現場では、観客に「真心」が分かるのかといった議論もありました。制作が始まった 2011 年、東日本大震災が起きました。人々が苦しんでいる時、映画を作っているものかどうか、私含めスタッフは皆悩みました。止めようかとも考えました。そこでトルコ大使や文化庁長官を務めた遠山敦子さんに相談したところ、遠山さんは、「大

震災、原発事故救援のためにアメリカ軍がやっている『トモダチ作戦』の後方支援をしているのは、トルコ海軍です。120年間、日本とトルコは友情を培っているのだから、ここで映画制作をやめては駄目でしょう」と言いました。120年前の名も知られていない人々の善意が、トルコという国を動かしていると、あらためて感じた瞬間です。

1890年和歌山県串本沖で遭難沈没したトルコ海軍のエルトゥール号乗組員を必死で助けた大島の村民の無償の行いが、1985年のテヘラン邦人救出に繋がり、1世紀にわたる二つの事実が一つの物語になったのです。

私はトルコのオルト県で、エルトゥール号遭難で生き残った1人と死亡した1人の末裔である2人に会いました。どちらかが死んだ場合は、どちらかが家族として面倒を見ることを約束した二人の末裔です。映画では機関担当の士官と機関員ですね。彼らは日本での出来事を先祖代々語り継いできたのです。伝説には弱者ありというわけです。

この映画は、一コマずつの組み合わせとスタッフの力の「いいとこ取り」してできました。ワンカットを撮るのに1～2時間かかり、2000カットで1本の映画になります。つまり一つ一つの小さな力が大きな結果となって現れます。映画界にはいい言葉があります。「理屈抜きで動いてみる」・「一歩踏み出さなければ何事も始まらない」・「本気なら言葉に出しましょう」・「積み上げる力は奇跡を起こす」一などなど。先程話をした、仕込み8割もそうです。

トルコでの撮影は友情があったから、普通ではできない口ケができたことも思い出の一つです。最後の空港での群集がひしめき合うシーンです。毎日1000人ものエキストラが20時間、それも4日間のリハーサル、5日間の本番撮影に付き合ってくれました。皆、串本沖での遭難事故で大島の人々がしてくれたことを知っているか



講義する田中監督

ら、惜しみなく協力してくれたのです。

私が監督した「利休」では、一期一会の本当の意味を知り、トルコでは人との出会い、人を大切にできる心が映画になることを学びました。日本では効率優先の撮影ですが、トルコではまずスタッフ全員で朝ごはんを食べてから、雑談して、それから撮影に入ります。自然と意思一致ができますから、結果的には効率アップにつながるのです。

次作はフランスの彫刻家ロダンの愛人を取り上げるつもりです。120年前のことです。実はロダンの愛人はハナコという日本女性です。現在、フランスの文化省と交渉中で、早ければ年内にもクランクインできるのでは、と考えています。

今日は大勢の方が「海難1890」を見ていただき感謝しております。ありがとうございました――

塾生感想

●リーダーの五原則に同感

○…日本人、さらに人間の根本的な美しさ、素晴らしさを感じた半面、それを曇らせてしまう現代の暮らしの在り方も痛感しました。両者の間には大きな壁があります。素晴らしい日本文化や人間の美しさを、個人として噛みしめ、それを会社、社会に還元していくことを行います。またそういったことを広める場を自ら作っていきたく感じました。

(曾田時大)

○…今までは、フェイクとは毛皮に使われている言葉だと思っていたのですが、大統領、しかも大国アメリカの大統領が、あれはフェイクニュース、これもフェイクニュースと叫んでいるのは驚きです。フェイクニュースが世界中を飛び交っている今日、ニュースを見極める自己の判断力が問われています。どうすればいいのでしょうか。杉江副塾長の5原則という話も納得でき、「海難1890」は映画館とDVDで見て今回で3回目です。毎回感動のしっぱなしです。貧しい村でトルコの船乗り食べ物を上げたら自

分たちの食べる物がなくなってしまうのに、村人たちは「助けなければご先祖様に申し訳ない」という言葉がありました。底辺に流れる日本人の心が表されていると感じました。本当に素晴らしい映画でした。

(朝倉祐子)

○…塾長講話での気づきです。インターネットは万能、あらゆる情報を知ることができると考えられてきたことが、実はごく限られた情報しか選択していないという事実に驚きです。検索システムが、本人の好みや嗜好によって作られているという特徴を理解することが大切だと思いました。人間の脳は、自分が「快」と感じることを選択するので、やはりメディア教育が重要と感じました。つまり思考停止してはいけないということです。

(阿部洋子)

○…私が「生き方塾に入っている目的は「無償の利他心」を持つことができる器を、自分の中に作り上げることにあります。「海難1890」は、無償の愛の価値、幸福感の高さが伝わってくる映画でした。真心＝他人のために尽そうと

する純粋な気持ちは、人を動かす、国を動かすことにつながることを知りました。(石井陽介)

○…杉江副塾長の話に興味を深く覚えました。私たちは「あつまる」という会社の中で、リーダーになっていかなければなりません。リーダーにはフォロワーがいなければなりません。そのためにはどうすればいいのかわからない。1人でも多くの仲間が自分に付いてくる道筋を教えられました。副塾長がおっしゃった五つのポイントを忘れません。(植松里菜)

○…副塾長から、リーダーとは人間力であり、自ら行動する、情熱を持つ、不正をしない、コミュニケーション力、自己診断力がある、など分かりやすい話を聞きました。仕事上、リーダーの役割を務めているので、意識して自己成長につなげたい。(加藤美智子)

○…フェイクニュースの話題で、自分にも当てはまること多くあることを認識しました。情報収集は通勤の電車の中で、ネットニュースやSNS頼りになって、テレビや新聞によるニュースは全く見なくなりました。そして自分が興味あることばかりに目を通す毎日です。それでは視野が狭くなり、偏った情報しか入らなくなり、正しい判断は

できなくなる。さらに誤った情報を拡散する加害者にもなりうる、と教えられました。(空閑愛子)

○…今日の学びは①やはり準備が大切②本気なら公言③理屈抜きに動く④アプローチの仕方はたくさんある⑤ネバーギブアップです。まずやってみて、決して諦めない。すると成功する。自分が本当にやりたいことを模索中ですが、大きなヒントをいただきました。(空閑陽一郎)

○…日本とトルコの友情という素晴らしい歴史をテーマにした映画を見て、感動し心にジーンとききました。ありがとうございます。(熊耳雅弘)

○…「海難 1890」で、日本人は本来、真心を持っている。これを思い出してほしいと感じました。才能あふれるスタッフをまとめる田中監督は素晴らしく、監督の人柄の良さは話している姿、立っている姿勢で伝わってきます。映画を見て涙が止まりませんでした。周りの人も同じでした。自分が信じたい情報だけが入ってくる現代。どうすれば自分は信頼される人間になれるのか、ということが大切になってくると感じました。(黒石涼)

●監督の心情表れた映画「海難1890」

○…「海難 1890」は、田中監督の心情が表れている映画だと思います。この映画を作るために、沢山の人が時間をかけ、決して諦めないかったことに、素晴らしさを感じました。社是に「無限の可能性を伝え続ける」とあります。地道に信念を貫き通せば、夢はかなうだと勇気づけられました。

(桑島祐子)

○…田中監督の「真心とは、見返りを求めない心、理屈抜きで動いてみる、一期一会、本気なら言葉に出しましょう」といった言葉が胸に刺さりました。仕事をすすめる上でも、生きていく上でも必要なことばかりです。

(佐藤恵)

○…私は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた宮城県出身です。被災直後、救援のため、いち早く駆けつけたのはアメリカの飛行機で、背景には、日本とトルコが主役となった1890年のエルトゥール号遭難事故、1985年のテヘラン邦人救出があったことを知りました。アメリカの後方支援をしていたのがトルコ海軍だった。ただただ驚き、一期一会。人との出会いを大切にしたいと実感しました。(佐藤陽子)

○…白鳥則生さんの「自らを語る」に感動しました。ハ



田中監督も参加した夜遊び学では活発に意見交換もインディキャップがあっても、自分自身の心の持ちようがしっかりしていれば、負けない心があれば人生は切り開けるという言葉を見習いたいと思いました。フォロワーを作る、リーダーになることなど、考えたことはありませんが、足りないところ、分からないところを教えてください。杉江副塾長の5項目を意識しながら、成長したいと思います。(篠原陽子)

○…トルコ海軍の船が遭難し、貧しいにもかかわらず、島の住民たちが「当たり前」として救援活動したことは、素晴らしいと思います。その「当たり前」が今の私と、島の住民とでは全くレベルが違います。忘れてしまった



夜遊び学を締めくくり塾生と田中監督で記念写真

日本人の心、真心を感じます。映画が素晴らしい理由を監督の話でよく分かりました。「人として正しいことに基づいて考え動く」をベースにした言葉。謙虚に反省、改善をする人間になりたい。**(田村楓)**

○…フェイクニュースの講義を聞いて、関東大震災の時、デマのために朝鮮人が虐殺されたことを思い出しました。IT時代になっても、人間そのものは少しも変わっていないと、感じました。ただ「人間には良識がある」と信じていたいし、その良識を子どもや孫にも伝えたいと思うばかりです。**(丹野栄)**

○…「フェイクニュースにだまされるな！」自分自身を振り返ると、見たいもの、信じたいものを前提として得ていたことに気づかされました。これからは公平公正な目を養うことが、自分自身への課題と思いました。監督の「積み上げる力は、奇跡を起こす」「理屈抜きで動いてみる」などの言葉は、内省する時の道標です。**(原田まり子)**

○…杉江副塾長の話。支持率、フォロワーを考えるとこの話は核心を突いています。「あなたのフォロワーは何人いるか?」、リーダーにとって必要なことを学びました。信頼は1日では築けません。フォロワーを増やすために必要なことが、杉江さんがおっしゃっていた5つの項目だと思いました。**(保谷恵子)**

○…フェイクニュースの講義を聞き、「異」を無意識に排除しているのではないかと感じました。違和感を覚えた時には、なぜ、そのような考えに至ったのか、一步踏み込み留まって考えてみることでと思います。**(前田香穂里)**

○…「本気なら言葉に出しましょう」。本気で思っているならば言葉に出すことが重要であり、その思いをさらに

強くするための秘訣だと思います。自分に足りないのは、そこなのだ、痛感しました。**(松井一真)**

○…社会人としては4か月の若輩者ではありますが、「理屈抜きで動いてみる」「一期一会」のこの2つを徹底させることが、成長への近道だと感じました。私も「伝説の弱者」になってまいります。**(三浦裕貴)**

○…フェイクニュースの話聞いていて、フェイクニュースが真実のニュースに勝ってしまうのではないかと危惧しています。「悪貨は良貨を駆逐する」ではありませんが、人に身勝手な欲がある限り、フェイクニュースはなくならないと思います。**(皆川猛)**

○…感動して涙が止まらない1日でした。特に久しぶりに聞いた「真心」という言葉が響きました。そして真心とは「利他の心」だと気づきました。田中監督と弊社の石井社長とは共通する点が多く、大切なものは普遍的なものだと感じました。**(諸泉佳那子)**

○…情報社会の今、清濁ごちゃ混ぜの情報で氾濫しています。何が正しく何が嘘なのか。自ら考え判断するしかありません。嘘の情報を流すメディアをなぜ取り締まることができないのかと思う。詐欺罪、偽計業務妨害罪などの法で摘発できないのだろうか。「表現の自由の下、何を発信してもいいというのは間違っている。**(渡辺薫人)**

○…日本とトルコの国をも動かす行い。2国間の友情、一般市民が国を動かした。その話は聞いていましたが、映画を見て、涙、涙、涙の2時間でした。心の内から湧き出てくる感動、人の真心に触れる喜び。時代が変わろうと、人の真心が人を動かし、世の中を動かす。この原理原則は変わらない。こう思わせてくれた映画でした。**(福島盛和塾・岩谷都子)**